

文化の力で東アジアに平和を。 「日中韓文化交流フォーラム」を開催。

財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団は、文化財の保存及び活用に関する事業の助成、芸術研究に係る活動の助成及び国内外の交流、世界各地の文化財の保護に関する交流・協力など多岐にわたる活動を行っている。その中の国際協力事業の一つに「日中韓文化交流フォーラム」の推進がある。設立は2005年。まず韓国で開催され、翌年に中国、そして2007年は10月に日本で開催された。



NHKで放映された「日中韓文化交流フォーラム」のシンポジウムの様子

同じ文化的遺伝子にだけわかりあえる感性とは。

日中韓文化交流フォーラムの基本的な姿勢や方向性を確認しあうシンポジウムが開かれた。この模様は、NHK教育テレビでも放映されたが、内容をかいつまんでご紹介しよう。

パネリストは豪華だ。中国から中国対外文化交流協会常務副会長の劉徳有さん。劉さんは、周恩来首相など中国の歴代の首脳の通訳もした方である。韓国からは、韓日文化交流会議委員長の金容雲さんが参加した。劉さんも金さんも日本生まれで日本語は達者であり、祖国と日本の文化の違いを熟知している。そして日本からは、国際交流基金理事長で韓国・フランスの大使も務めた小倉和夫さんと、AJOSCの名誉会長で日中友好協会会長でもある平山郁夫画伯である。



「高句麗壁画」と「高松塚壁画」を並べて見ると、衣装や風情がよく似ていることがわかる

① 日中韓三国には同じ遺伝子が宿る

日中韓の三国はシルクロードを通して長い間文化交流を行ってきた。平山画伯の代表作「卑弥呼擴壁幻想」は、歴史から見て卑弥呼は当時の朝鮮人のような服装をしていたであろうとイメージし、高句麗壁画を参考に描かれたものだ。その数年後、高松塚古墳が発見された。果たして、2つの壁に描かれた人物の衣装や風情は瓜二つだった。

劉さんからは、こんなエピソードが紹介された。

李白の作で「山中にて幽人と対酌す」という七言絶句がある。この幽人とは、人里離れた山中に住む隠遁者のことで、日本人や韓国人なら漢字からすぐにイメージができる。ところが欧米人に話すと、まったく理解してもらえない。拳句の果てに「OH! He is homeless」(なるほどホームレスですね)となってしまうようだ。

このように漢字を共有できるからこそ分り合える精神世界が無数にあるという。逆に日本で初めてタクシーに乗った中国人が「毎度、ご乗車有難うございます」と書かれているのを、漢字だけ拾い読みして「乗る度に難の有る車」だと思ってあわてて降りたという面白い実話も交えながら、シンポジウムは進んでいった。

文化交流を深めて真の「諍友」となろう。

② 似ているがゆえに、違いも端的に表れる



中国・敦煌莫高窟で文化財保存修復の研修を行う日本人研究者

この三国は共に儒教の影響を受けた文化を持つ。儒教は五常(仁、義、礼、智、信)という5つの徳性をもって、人間関係を円滑にするという考えがあるが、日中韓では重きを置く部分が異なるのだ。中国は、仁や義を尊ぶ。それゆえ、もっとも人気のある物語は「三國志」や「水滸伝」である。韓国では礼、あるいは孝に重きがおかれるため長幼の序に厳しく、人気のある物語は「沈清伝(シムジョン)」で、これは親のために身を捧げる話だそうだ。日本の場合は「私」は裏に回り「公」の立場が強くなる。つまり「忠」を重んじるので、「忠臣蔵」がベストセラーになるのである。

源流が同じでも、時の政治体制や気候風土によって文化が変わることを端的に表す話だ。逆に、この点に注意しないと摩擦に発展することもある。韓国の方は初対面の女性に対して「おいくつですか?」と尋ねる。日本であれば失礼な行為になるが、年上に対する作法に

厳しい韓国では当然の行為なのである。

③ 過去の文化が別の国の文化に保存されている

漢字はもともと中国からやってきたが、逆に日本から入っていった言葉も多い。「経済」「哲学」「場合」など無数にある。韓国のハン

グル語によって昔の漢字の音読みが判明することもある。このように、助け合いながら今まで来たことをベースにおいて、文化交流を続けるべきである。

④ お互いを尊重しながら、理解しあう

文化が異なるからこそ、そこに魅力がある。経済は一体化しても、文化はそれぞれの個性を大切にしながら、理解しあうことが大切。その方が圧倒的に意義がある。

韓国には「和諍」という言葉があるそうだ。「諍」は言い争うこと。しかし言葉であればどんなに論議をしても、それは最後には「和」となる、という教えだそうだ。一方、中国には「諍友」という言葉がある。なんでも言い合える友のことである。日本人にはどちらも初めて目にする言葉だが、すぐに納得できるのは、同じ文化遺伝子がなせる技であろう。時には政治関係がぎくしゃくすることもある。そのときこそ、文化交流が大切なのであり、真の「諍友」への道だとシンポジウムは結んだ。

●担当者より

日中韓の絆を強めるヒントがいっぱいのシンポジウムになりました。



当財団はこれまでもアジア各地で文化財保護活動を助成してきました。すべて寄付金頼みですが、残念ながら文化事業への助成金は年々低下しており、こうした大きなイベントを開催するには、予算の面で本当に苦勞しております。AJOSCさんのご支援で、日中国交正常化35周年にあたる今年度本格的なフォーラムを開催できたことをたいへん嬉しく思い、また心より感謝申し上げたいと存じます。NHKには再放送の依頼も多く寄せられているそうです。もっとも身近な隣人たちといがみあうことは、なんのメリットもありません。千年以上のつきあいのある間柄なのですから。

財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 事務局長 渡邊幸夫さん